

## 今日の説教のポイント <創世記1章6-25節>

①神様は神様の仕方世界を造られた。それでいいではないか。大事なことは、私たちがその造り主なる神様に聞いて生きるということ。

創世記第一章を読むときに大事なことは、個々の具体的な内容（例えば、植物の分類の仕方）に関心を寄せるのではなく、全体でもって伝えようとしていることを考えることです。聖書は、生物が活動する舞台となる世界の創造（10節まで）、人間以外の生物の創造（11～25節）、そして人間の創造（26節以下）と順番に造られて行ったことを記していますが、大事なことは、「神様が神様のなさり方で世界を造られたのだ」ということです。それで十分です。人間は猿から進化したという説を「言語道断だ。神様は人間を造られたと聖書には書いてある、猿から進化したなどとは言っていない」と怒られる方がいますが、神様が人間を猿から進化させる方法を探られたなら、それはそれでいいのではないのでしょうか。大事なことは、神様が世界を造られた、だからその神様に聞いて生きなければ神様に造られたものとしては生きていないことになる、ということだからです。聖書は科学書ではなく信仰の書なのです。

②世界は神様が「良し」とされるものとして造られた！

できていくものに対して神様が「良し」とされたことが繰り返し記されています。直訳すると、「神は見られた、するとそれは良かった」です。この「良し」という言葉には美の意味も含まれています。31節で、個々のものに対してだけではなく、出来上がった世界全体を見られて「極めて良かった」と言われているのには、世界の被造物全てが一つになって、喜び溢れ、感謝を表している美しさを感じさせられます。原発事故を起こし、人間だけでなく様々な動植物も、否、生物以外の被造物までもが美から遠く汚され、喜びではなくうめき、感謝ではなく悲観を覚えさせられている今の日本。どうすればいいのか？ 救いの道はあるのか？ イエス・キリストを与えて下さり、人間が罪を犯しても犯しても、なお、赦し、語りかけて下さる神様。その神様の声に聞いて歩み直すときに救いの道は用意されているのです。